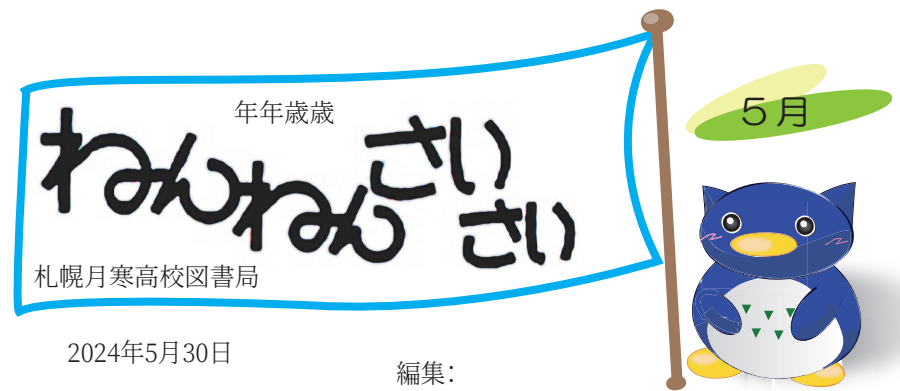




2024年5月30日

編集:

花鳥風月

春は進級、進学など新たな一步を踏み出す人が多いとは思いますが、植物でも新たな生命が芽吹く季節であります。その命の中でもとりわけ強い臭いを放つのが北海道を代表する山菜である行者ニンニクです。

行者ニンニクは『アイヌネギ』の別名を持ち、その名の通りアイヌの人々にとって大事な食べ物となっています。健康にいいので体の弱い人にはたくさん食べさせますし、風邪薬としても使われていました。またその強烈な臭いは悪いものを遠ざけると信じられており、病が流行ったときには必ず窓や戸口に吊るしています。

ちなみに、行者ニンニクと似ているイヌサフラン（毒性あり）を食べて亡くなったという事件も稀に見ますので、採取の際は気をつけてください。（ ）



今回は、図書館に設置されているコーナーについて紹介します。

The See 雑誌

このコーナーでは、筆者が図書館のお勧めスポットを紹介します。

月寒高校の図書館では、科学雑誌『Newton』、絵本に関する雑誌『MOE』、音楽雑誌『ROOKIN' ON JAPAN』など 14 種類の雑誌を定期購読しており、最新号以外は借りて家で読むことも可能です。

私が特にお勧めする『Newton』は話題の最新研究やニュースはもちろん、難しい数学や物理、天文など幅広く科学に関する内容を写真やイラストを用いてやさしく解説してくれます。理系科目に苦手意識を持っている方にもお勧めです。これを読むときと皆さんも科学の浪漫に引き込まれることでしょう。

雑誌には小説とはまた違った魅力があります。時には雑誌コーナーに足を運んでみるのもいかがでしょうか。（ ）



↑ここが雑誌コーナー



七月隆文 著
幻冬舎



辻村深月 著
講談社

みなさんは、写真を撮る時、「ここだっ!」という瞬間に出会ったことはありますか? また、加工しなくても「いい」と言い切れる写真を撮ったことがありますか?

この本は、ある写真家が一人の少女と出会い、様々な写真を撮る中で、日常の中に潜む「素敵なもの」について考えていくというお話です。普段何気なく目にしているものでも、他の人から見たらすぐきれいなものかもしれません。他の人の好きなものが、自分の好きなものと同じことだってあります。写真に収めたいものというのは、何も風景だけでなく、友達と過ごす時間を切り取った瞬間だという人もいるでしょう。私達の身の回りにある幸せを感じられる1冊です。ぜひ読んでみてください。（ ）

『ぼくときみの半径にだけ届く魔法』

「僕にとっての『SF』は サイエンス・フィクションではなく、少し不思議な物語のSF (少し不思議) なのです。」— 藤子・F・不二雄

写真家の父と入院中の母を持つ主人公、理帆子。どこか達観していて、どこに行っても心から楽しめない代わりにどこにでも馴染める。好きな場所へ行くように、人の心から心を自由に移動する「どこでもドア」の持ち主だ。そんな彼女はSF (少し・ナントカ) とその人の個性を表すクセがある。何をしてもどこか足りない理帆子は「少し・不在」。社会性はないが、かわいそうな雰囲気をもとって許されてしまう、カワイソメダルの持ち主。元カレの若尾は少し・不自由。

「少し・〇〇」、あなたの個性は何でしょうか。なんの道具を持っていますか。この小説を読んで確かめてみてください、きっと共感できる部分があると思います。（ ）



このコーナーでは、局員が今までに読んだ本を評価とともに紹介していきます。

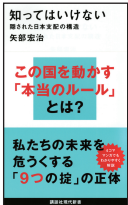
政治、日米問題、陰謀論、ニュースなどでこのような言葉を耳にした時、つい目を背けてしまう。あるいは難しそうで、聞く気になれないと思ったことはないでしょうか。本書では日米関係についてわかりやすく説明しています。例えば、なぜ米軍基地が日本から無くならないのかという問いについて、4 コマ漫画も用いながら「憲法9条で国内に自由に基地を置ける権利を与えてしまっているから」と簡明に答えています。その他にも、多くの密約が結ばれると言われている日米合同委員会の正体など、たった 255 ページで日本が抱える問題の歴史的経緯や法的構造が明らかになります。

政治に関する知識がなくとも読みやすく、最後まで知的好奇心をくすぐられる構成となっています。日本の政治の問題の核心に迫る1冊。是非読んでみてほしいです! ()

読みやすさ

面白さ

ためになる度



『知ってはいけない 隠された日本支配の構造』
矢部宏治 著 / 講談社



岩波文庫の創刊まで

飾り気がなく、無駄が削がれたデザインのカヴァー。本屋などで一度は目にした事があるのではないだろうか。それが文庫といえの三つ指に入る岩波文庫である。近現代の古典がほとんどを占める硬派な選書で、国語の教科書に載っているような文学作品からニッチな作品まで幅広く出版されている。今回は 20 世紀初頭に焦点をあてて岩波文庫の原点に迫っていこうと思う。

岩波文庫が創刊されたのは昭和の始め。その少し前に、大正末期から続く出版業界の不況を開きやすく、改造社という出版社から「円本」と呼ばれる1冊1円、完全予約制の全集本で、廉価な売値で大量生産するものが発行された。これが大ヒットし、他の出版社も競うように円本の発行に乗り出すようになる。これは後に「円本騒動」と呼ばれるほど出版業界にとって革新的な出来事だった。高価だった本が、庶民にも買える時代の流れを作ったのである。その円本騒動が少し収まり始めた昭和2年。円本のブームに乗り遅れ、傍観する形になっていた岩波書店の創業者岩波茂雄は、このころ岩波文庫出版の計画を立ち上げる。「古今東西の古典の普及」を銘打ったそれは、円本のような全集本ではなく、それ以前にあった「アカギ叢書」という小さなサイズの十銭本念頭に置いた形式のものだった。近年に似たようなものは無く、売れるかわからない状況だったものの、時代の流れ、当時社員20名ほどだった小さな出版社の存続を踏まえると、計画を進めるしかなかったのである。そうして昭和2年7月10日、「万葉集」や「こゝろ」を含む22冊が発刊された。この反響は予想を遙かに越える大きなもので、激励や感謝の投書などを多くもたらした。この記念すべき第1回の配本から、岩波文庫の歴史は続いていくのである。

岩波茂雄氏の生誕地長野県の長野県立図書館には、第1回配本以降発行されてきた岩波文庫を個人が集め寄付した約8000冊が常設展示がされている。貴重な古書を、なんと全て手にとって見る事ができるのだ。昨年、私は現地に行ったのだが、壁三面に及び棚に歴代の茶けた背表紙と色帯が並ぶ姿は壮観、としか言いようがなかった。昭和2年第1回配本時の初版がまして何冊も並ぶなど、古本屋でその目にかかれな。当時の右から読む横書きの字、色味、判型(本のサイズ)なども並ぶその時代ならではのものである。第一回配本から1983年までの本はカヴァーが無く、代わりにパラフィン紙がかけられ(日焼け、水に強い半透明の紙。経年でぼろぼろになるがそれも又よし) 価格は奥付、昭和6年以降は色別の帯にも表記され、価格は★ひとつ100頁で20銭。これは当時はカレーライス1杯と同じくらいだった。

現在の岩波文庫のカヴァー下が当時の表紙であり、平田百穂画伯が正倉院所蔵の古鏡「鳥獣背方鏡」の模様からとり手掛けたもの。まだ当時の岩波文庫は中のフォントも野暮ったく、天のアンカットも綺麗ではない。ちなみに現在岩波文庫にも残るこのアンカットの伝統は、フランス装を意識したものであり、昭和45年に廃止されるまであったスピン(紐の栞)を仮綴じ本につけるには天(上部)だけは切らずに残す必要があったとも。他にも帯の違い、整理番号の違い、はたまた旧字体の使用など、目の前広がる本を目いっぱい見て調べることができるというのは大きな喜びだった。また、発行部数の少ないまま絶版となり稀覯本となったものや、復刊のないもの、複数収集されている同じ本などを見ることができ、歴史的な重みを全身で感じ、本当に実りの多い経験ができたと感じている。また、一高校生に熱心に展示について教えてくださった長野県立図書館の司書さん、本当にありがとうございました。

まだまだ語りたいことは沢山あるが、尺の都合上この辺で筆を置くことにしよう。この特集で、読者が図書館の棚を見た時の気づきや視野が広がっていれば幸いである。それまで見えてなかった作品が目に入りようになり、出会う本が増えれば、もっともっと本を選ぶことが楽しくなるのではないだろうか。()



↑ここが今回紹介した長野県立図書館の展示